

I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021年度大学評価結果総評】(参考)

スポーツ研究センターは、2020年度大学評価委員会の評価結果への対応や研究活動、目標の達成状況などの点から見て、良好な成果を上げていると評価できる。2021年度は、2018-2021年度中計の最終年度であり、年度目標や達成指標は継続性も重要であるものの、年度目標や達成指標の中には、2019年度と類似のものが書かれており、これらの具体性をさらに深化させるなどの形で、目標自体を更新した方が良く見えるものもある。2020年度は、本学で従来取り組まれたことのない新型コロナウイルスの感染拡大防止のための対応を新たにする必要があったので、目標の具体的な深化をはかることは困難であったし、また、既に充実しているスポーツ研究センターの研究活動をさらにどのように改善していくのかを考えることは容易ではないことは承知している。そのような中でも新たに加わったオンライン会議システムなどのツールを活用した研究活動の今後の展開に期待したい。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2021年度の総評として指摘された「目標自体の更新」について検討し、全学的な組織である本センターがこれまでに対応できていなかった教職員を対象にした職域内での活動を新たに目標として設定した。また新型コロナウイルスの感染拡大は予防しつつも、本センター所属所員の研究活動から得られた知見をより周知するために、従来のオンライン上での業績提示を主とした状況から、セミナー・研究会等を通じた積極的な情報発信の機会を設け、学生・教職員・学外者など、学内外の幅広い対象に向けて研究成果の還元を達成したいと考えている。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

スポーツ研究センターは、2021年度の大学評価委員会の評価結果において概ね適切との評価を受けていた。研究活動も含めた対外活動においては顕著な実績を示していたが、過年度から目標設定が変わっていないことが指摘され、それについて改善することが求められていた。当センターは、この指摘に対して、教職員を対象にした職域内での活動を新たに設定し、これまで獲得した知見を学内に広めるという目標を加えることで対応している。対外的な活動は非常に活発で優れたものであるため、それが学内にうまくフィードバックされることを期待している。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、研究所(センター)の目的を適切に設定しているか。

1.1①研究所(センター)として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。2018年度1.1①に対応

はい

※理念・目的の概要を記入。

本センターは、スポーツ科学の調査及び研究を目的としており、これを遂行するためスポーツに関する文献、資料の収集、保管をし、それを活用しながら研究を進め、その成果を公表することで社会に還元することを目指している。また体育施設の運営も目的の1つとして定めており、体育施設の有効的な活用を通じ、体育会をはじめとする学生のスポーツ活動、さらに学生が健康を維持・増進するための活動に対して助言や指導することもセンターの事業となっている。

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018年度1.1②に対応

※検証を行う組織(各種委員会等)や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

運営委員会を年間4回程度開催し、目的や具体的な事業の適切性について、活動内容や問題点の確認、各事業の検証を踏まえ、所員間で審議や意見交換を行っている。この確認や審議などに鑑み、センター所員がその能力をセンターの理念・目的に向けて適切に発揮できるようセンター規程を適宜改定し、各事業の推進に向けた基盤整備を行っている。

1.2 研究所(センター)の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①研究所(センター)の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018年度1.2①に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

はい

**(2) 長所・特色**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

スポーツ科学に関する幅広い分野を専門とする所員によって構成されており、目的達成のための各事業の推進に適した組織となっている。また、研究と実践の両者に関与する所員を中心に、研究の成果をスポーツや身体活動の実践へ繋げる環境が整備されている。またこれらの研究や実践は、競技者（体育会所属学生）のみを対象とするものではなく、学内各体育施設の適切な運営によって学生全般に有益な研究や実践の結果を示している。また、センター発行の紀要には学内者であれば一定の審査を経た後論文や報告を掲載できる状況にあり、スポーツ・身体活動に関する全学的な研究活動の中心としての役割も担っている。

**(3) 課題・問題点**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

従来の活動に問題点はないが、全学的な組織でありながら、これまでの研究・実践の対象は学生や地域住民が主体となっており、その内容もスポーツ活動に関する指導・助言が中心となってきた。しかしながら、教職員に対する指導・助言等の活動を行うための基盤が欠如している。全学的な組織という性格上、従来の学生および地域住民に向けた研究成果の還元だけでなく、教職員を対象とした職域におけるスポーツ活動や健康づくり活動の充実も検討に値するかもしれない。このような課題の解決に向け、規定の改訂を検討しているが、環境が整い次第学内の関連部局と連携しつつ職域での活動を充実させていく予定である。

**【理念・目的の評価】**

スポーツ研究センターは、スポーツ科学分野の調査・研究、関連文献の収集と保管、研究成果の対外公表を通じた社会還元、体育施設の運営、学生の健康増進など多岐にわたり、これらの運営目的は研究センター規程およびホームページにて公表されている。運営理念・目的の検証については、当センターの運営委員会開催におけるディスカッションを通じて行われており、適時規定の改定も行うなど適切に運営されていることが伺われる。

また、当センターの学内外における理念・目的の周知は、学生や地域住民へのスポーツ活動に関する指導・助言、学内の紀要、研究発表等を通じて行っており、適切に活動が行われていることを示している。また、スポーツ活動に関して、その対象が学生や地域住民に偏りがちであったということを認識し、今後に向けてその範囲を教職員に拡大しようという改善意識がみられることは非常に評価できる。今後のさらなる発展を期待したい。

**2 内部質保証**

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

2.1①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応

はい

【2021年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

2021年度第1回のスポーツ研究センター運営委員会で、2021年度の質保証委員会設置およびセンター所員およびセンター所員以外の委員選出を審議・決定した。これに伴い、質保証委員を委嘱し、2021年度の本センターにおける活動内容の点検・評価を依頼した。

**(2) 長所・特色**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
状況に応じてスポーツ研究センター所員以外の委員を加えることができ、より専門的にかつ客観的な評価を受けることを可能としている。

### (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
学内のスポーツ科学を専門とする教員の多くが本センター所員となっているため、所員以外の委員委嘱に際して、対象となる教員が限定されてしまうという問題がある。センターの行う活動内容の点検・評価を行うという業務内容に鑑み、今後は教員だけでなく過去にスポーツ研究センターや保健体育センター等に在籍した経験のある職員にも質保証委員への委嘱を検討する予定である。

### 【内部質保証の評価】

スポーツ研究センターでは、2021 年度にスポーツ研究センター所員以外の委員によって構成される質保証委員会が設置されたことは評価できる。センター所員以外による、より専門的にかつ客観的な評価を受けることを可能するため関連分野の教員が質保証委員を担当することになるが、学内における関連分野の教員の数が限定されるため、委員の委嘱が難しいという問題に直面している。今後は教職員への研究フィードバックも積極的に行っていくとのことなので、この繋がりを通じて当センターが提起しているような職員だけでなく、他分野の教員にも委嘱候補が見つかることを期待している。内部質保証に関して総合すると、現状だけでなく、長期的な視点も持ち適切に運用されていることが伺われる。
--

## 3 研究活動

### (1) 点検・評価項目における現状

#### 3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

##### 3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）2021年度1.1①に対応

※2021 年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

#### 【スポーツ研究センター内】

2021 年度は、以下 6 つの研究プロジェクトを実施した。

- ①在校生の大学スポーツに対する認知度ならびに評価が大学への帰属意識醸成に与える影響について
- ②アスリートのライフスキルに対する自己調整学習の寄与
- ③東京 2020 大会の開催に関する東京都民の認知 —長期間にわたる大規模パネル調査—
- ④学生アスリートの競技特性不安、心理的競技能力、自我状態の関係の解明
- ⑤表面筋電図を用いた持久性運動中の内的注意および外的注意の評価に関する検討
- ⑥本学学生の初年次における体格・体力について（体力測定プロジェクト）

新型コロナウイルス感染拡大を受け、年度末に開催予定であったプロジェクト報告会はオンラインでの開催となったが、各プロジェクトの内容についてセンター内での周知を行った。また、既に 1 編が査読付学会誌に、2 編が 2021 年度の本センター紀要に掲載済みである。なお、⑥については、コロナ禍において実技・演習の実施が困難な状況を受け、従来の全学共通種目の実施は不可能な状況であった。しかしながら、各学部の科目責任者に個別にデータの提供を依頼し、コロナ禍、さらには対面での実施が困難な状況における体力・形態測定の実施事例として有益な情報をまとめることが出来ている。

#### 【対外的活動】

\* 『日本水泳連盟 2021 年度ワールドユニバーシティゲームズ候補選手 zoom 研修事業』, 2021 年 8 月 17 日, オンラ

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

イン、大学生および競技者のライフスキル、講師担当、荒井弘和

- \* 『ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2021』, 2021 年 12 月 17～18 日, オンライン, 未来のハイパフォーマンススポーツの心理サポートについて考える～日本と諸外国からの多角的議論～, パネラー担当, 荒井弘和
- \* (セミナー)『子供たちの発達と成長についてオンライン講座(日本ボクシング連盟スポーツ科学委員会主催)』, 2021 年 7 月 10 日, オンライン (Zoom), テーマ: 成長・発達から考える子供たちの傷害予防とパフォーマンスアップのためのエクササイズ, 内容: 本邦のアマチュアボクシング指導者と保護者を対象に発育・発達時期の子供たちに対するトレーニングについて、特に外傷・障害予防の観点から、ウォーミングアップとクーリングダウンの意義を講演した。特にウォーミングアップについては根拠も基づいたエクササイズをボクシングの練習メニューのバリエーションから実践できる形にして解説を行った。 泉 重樹
- \* (セミナー)『ボクシングとバイオメカニクス (2021 年度 公認ボクシングコーチ 3 講習会(専門科目))』, 2022 年 2 月 26 日, オンライン (Zoom), テーマ: ボクシング競技におけるバイオメカニクスの考え方, 内容: 本邦のアマチュアボクシング指導者を対象にボクシング競技におけるパンチ動作を中心とした技術の運動学的・運動力学的分析の先行研究およびストレングス・コンディショニング分野における先行研究を紹介し解説した。また実践研究として世界レベルのボクシング選手のストレングス・コンディショニングトレーニング例を紹介した。 泉 重樹
- \* (プロジェクト)『第 75 回日本アンデパンダン展でパフォーマンスを実施する』, 2022 年 3 月 23 日, 国立新美術館 (東京都), テーマ「ソーシャルディスタンス」, 内容: コロナ禍の現代社会における人の想いや希望について、身体表現を通してコミュニケーションを試みる。 越部清美
- \* (シンポジウム)『日本養生学会第 23 回大会 ようせいフォーラム 2022』, 2022 年 3 月 5 日, 愛知大学 (愛知県), テーマ「これからの養生ー「今の自分」と向き合うー」, 内容: 身体表現の活動を通しての気づきや学びについて語る。 越部清美
- \* (セミナー)『障害者のためのレクリエーション支援者養生研修会』, 2022 年 1 月 22 日, 全国障害者福祉センター (東京都), テーマ「制限された空間でのレクリエーション」, 内容: オンラインでの表現活動の可能性について、全国の障害者のレクリエーション支援を担う方々を対象とした研修会。 越部清美
- \* 静岡県スポーツ協会主催 令和 3 年度競技力向上対策事業『ジュニアアスリート指導者資質向上・アスリートの卵育成指導者資質向上研修会』, コーディネーター兼第 1 回・第 5 回講師, 杉本龍勇
- \* (講習会)『POP TENNIS 主催メンタルトレーニング講座』, 2021 年 7 月 10 日, オンライン開催, テーマ「勝者のメンタリティを手に入れるためにはどうしたら良いのか?」について, テニス選手, 指導者らを対象に講習会を実施。 中澤 史
- \* (講習会)『芝浦工業大学柏中学高等学校サッカー部部員・指導者対象メンタル講習会』, 2021 年 7 月 18 日, 芝浦工業大学柏中学高等学校 (千葉県), テーマ「パフォーマンス向上へのメンタル強化について」, 同校サッカー部員及び指導者を対象に講習会を実施。 中澤 史
- \* (講習会)『令和 3 年度日本スポーツ協会公認コーチ 2 養成講習会』, 2021 年 7 月 31 日・8 月 1 日 (第 1 会場) および 2021 年 8 月 21・22 日 (第 2 会場), 日本スポーツ協会 (オンライン), 令和 3 年度 共通科目 II WEB 講習会,
- \* (講習会)『令和 3 年度日本スポーツ協会公認コーチ 3 養成講習会』, 2021 年 10 月 9・10・16 日 (第 4 会場) および 11 月 6・7・13 日 (第 6 会場), 日本スポーツ協会 (オンライン), 令和 3 年度 共通科目 III WEB 講習会, とともに全国大会レベルの競技力向上を目的としたコーチングを行う上で必要な資質能力の研鑽を行った, トップリーグ・実業団等でのコーチングスタッフとして, ブロック及び全国大会レベルのプレーヤー・チームに対して競技力向上を目的としたコーチングを行う者を対象。 山田 快

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

- \* (セミナー)『“アスリートの卵” 育成者資質向上研修会』, 2022年2月3日, 静岡県スポーツ協会(オンライン), 効果的なコミュニケーションに基づいてトレーニングを模索する, コーチングにおいて最も重要なスキルとなっているコミュニケーションに関する知識や実践的示唆を提供し, 参加者とともに今日に求められるコーチの在り方をディスカッションした, 主に子どもを対象にスポーツ指導を行うコーチを対象. 山田 快
- \* (セミナー)『令和3年度JOCナショナルコーチアカデミー』, 2021年9月16日, 味の素ナショナルトレーニングセンター(東京都北区), テーマ「メディア論」, 内容: 巨大イベントに関わるメディアの在り方, 競技スポーツ現場でのメディアの行動について講義形式で教授, 各競技団体から派遣されたナショナルコーチを受講生として. 山本浩
- \* (セミナー)『一般社団法人 子ども未来・スポーツ社会文化研究所 第10回記念オープン・セミナー』, 2021年9月25日, オンライン, テーマ「スポーツ実況の真実」, 内容: 東京オリンピック・パラリンピックをうけて, 現代のスポーツ中継がどのような変容を遂げているのか, 技術革新を軸に放送そのものがスポーツ観にも影響を及ぼしていることを指摘, 関西在住のスポーツ研究者/スポーツ指導者を対象に実施. 山本浩
- \* (セミナー)『日本サッカー協会S級講習会』, 2021年10月21日(木), 千葉市・幕張夢フィールド, テーマ「プロスポーツのメディア論」, 日本サッカー協会認定の最高位指導者資格S級を受講する者に, メディア論を説く, 国内のサッカーS級受講者. 山本浩
- \* (プロジェクト)『福岡スポーツ未来ビジョン』, 2022年11月30日/12月21日/2月3日, オンライン<福岡県スポーツ局>, テーマ「福岡県における大規模スポーツ大会開催のあり方について」, 内容: 福岡県が計画する大規模スポーツ大会のあり方やそのための準備・態勢づくりに何が求められるかオンラインで議論する, 福岡県が指名した各界の専門家が一堂に会して, オンライン上で議論を重ねる, 傍聴するのは福岡県議会議員, 福岡県スポーツ局職員. 山本浩
- \* (シンポジウム)『東京オリンピックのレガシーとは』, 2021年12月2日(木), 日本女子体育大学, テーマ「東京オリンピックのレガシーを見る」, 内容: IOCが捉えるレガシーと開催都市/開催国が捉えるレガシーの間にある乖離に関して, 社会にとってのスポーツの価値の再検討をする, 日本女子体育大学教職員と専門学部生. 山本浩
- \* (海外ドキュメンタリー出演)『KBS報道ドキュメンタリー ～コロナ窩の五輪の意味～』, 韓国KBSのディレクターによるインタビュー収録・出演, 2021年7月4日(日)22:00～KBS1放送<収録5月4日>, 新型コロナウイルスが収まらない中で開催される東京大会の意義や政治とスポーツの関係に関して, 韓国国民を対象に放送に部分出演. 山本浩
- \* (NHK福岡放送局ニュース出演)『NHK福岡ニュース 610』, キャスターとの対談形式によるニュース出演, 2021年6月23日18:10～NHK福岡, 五輪の開催意義や自治体の対応 アスリートの現状などさまざまな角度から多角的な視点で指摘, 福岡県内視聴者を対象とする. 山本浩
- \* (フジテレビ出演)『週刊フジテレビ批評』, 定時放送の放送批評番組にフジテレビスタジオで出演, 2021年7月3日(土)5:30放送, 「オリンピック中継への準備と覚悟」と題して五輪放送の要件や環境の違いを放送者の立場から分析, 指摘する, フジテレビの視聴者を対象とした番組. 山本浩
- \* (東京五輪中継間解説)『東京オリンピック中継』, オリンピック開催期間中NHKGテレビの五輪中継スタジオ受けの時間帯に解説者として出演, 2021年7月25日/26日/29日/30日/31日/8月2日/3日/4日/6日/7日, 競技間のスタジオからの受け場面で競技力以外のスポーツの見方を説く, 一般視聴者対象. 山本浩
- \* (東京五輪総括解説)『東京オリンピック/パラリンピックを振り返る』, NHKラジオの朝番組の五輪/パラリンピック総括番組出演, 2021年9月9日/16日/23日各7時30分～8時, 五輪/パラリンピックの準備, 途中の混乱, 実施,

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた, A: 従来通り効果的に取り組むことができた, B: 改善することができなかった。」を意味する。



終了後の振り返りと3回にわたって解説，一般聴取者対象。 **山本浩**

- \* (北京冬季五輪解説)『北京冬季オリンピック解説』, NHK ラジオで中継された北京冬季五輪の開会式/閉会式それぞれの解説, 2022年2月4日/20日 21:00~, 開会式・閉会式の実況中継の間にスポーツ文化論的なテーマで解説を加える, 一般聴取者対象。 **山本浩**

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021年度プロジェクト報告

### 3.1②対外的に発表した研究成果(出版物、学会発表等) 2021年度1.1②に対応

※2021年度に研究所(センター)として刊行した出版物(発刊日、タイトル、著者(当研究所関係者は下線付記)、内容等)や実施した学会発表等(学会名、開催日、開催場所、発表者(当研究所関係者は下線付記)、内容等)の詳細を箇条書きで記入。

#### 【論文】

- \* 『防災キャンプ活動中のヘモグロビン濃度とストレスの変動』, **伊藤マモル**・宮崎賢哉, 2022年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第40号, P.17-P.23.
- \* 『オンラインシステムを利用したスポーツ総合演習における体力測定を試み』, **伊藤マモル**・大西朋・三好英次・山田優香, 2022年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第40号, P.25-P.36.
- \* 『長期休養による身体機能低下とその予防法:精神面への影響』, **荒井弘和**, 2021年, 臨床スポーツ医学 38, P.954-P.959.
- \* 『対話を通して尊重の態度を形成する一連帯の未来図一』, **荒井弘和**・武田大輔, 2021年, 体育の科学 71, P.425-P.431.
- \* 『大学生アスリートを対象とした価値を考えるゲーミフィケーションの効果』, **荒井弘和**・深町花子・千葉順, 2022年, 法政大学スポーツ研究センター紀要 40, P.13-P.16.
- \* 『COVID-19における長期休止期間からの大学スポーツ再開後のセッション RPE と外傷・障害の関係』, **泉重樹**・石黒文都・能勢将輝・根ヶ山未裕, 2021年3月30日, 法政大学スポーツ健康学研究 12, P.33-P.40.
- \* 『女子バスケットボール選手のリバウンド動作時における下肢キネマティクス』, 瀬戸宏明・篠塚ななみ・**泉重樹**・**平野裕一**, 2021年4月, 日本臨床スポーツ医学会誌 29 (2), P.260-P.267.
- \* 『鍼治療がスポーツ選手の競技活動に及ぼす影響』, 藤本英樹・金子泰久・**泉重樹**・櫻庭陽・吉田行宏・鳥海崇・池宗佐知子・玉地正則・吉田成仁・近藤宏・古屋英治, 2021年5月, 全日本鍼灸学会雑誌 71 (2), P76-P85.
- \* 『ジュニア女子新体操選手におけるボール投げの高さと筋パワー及び筋力との関係』, 佐藤彩乃・犬走渚・**泉重樹**, 2021年7月, トレーニング科学 33 (2), P.155-P.162.
- \* 『高校ラグビー部における2年間のATサポートと外傷・障害発生報告』, 池永真・山口健・**泉重樹**, 2021年10月31日, 日本アスレティックトレーニング学会誌 7 (1) P119-P126.
- \* 『女子プロゴルファーの腰背部痛に対する M-Test による円皮鍼治療の一症例』, 櫻庭陽・近藤宏・**泉重樹**・森山朝正, 2021年11月, 全日本鍼灸学会雑誌 71 (4), P.236-P.244.
- \* 『High-intensity interval training in breast cancer survivors: a systematic review』, Tsuji K, Matsuoka Y, **Ochi E**. BMC Cancer (2021年)21巻1号, Article number: P184

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

- \* 『Aging of the immune system and impaired muscle regeneration: A failure of immunomodulation of adult myogenesis』, Tidball JG, Flores I, Welc SS, Wehling-Henricks M, **Ochi E**. *Experimental Gerontology* (2021年)145巻, 111200.
- \* 『Plasma Eicosapentaenoic Acid Is Associated with Muscle Strength and Muscle Damage after Strenuous Exercise』, Tuchiya Y, Ueda H, Yanagimoto K, Kato A, **Ochi E**. *Sports (Basel)* (2021年) 14巻9号P11.
- \* 『4--week eicosapentaenoic acid-rich fish oil supplementation partially protects muscular damage following eccentric contractions』, Tuchiya Y, Ueda H, Yanagimoto K, Kato A, **Ochi E**. *Journal of the International Society of Sports Nutrition* (2021年3月)18巻1号, P18.
- \* 『Low dose of  $\beta$ -Hydroxy- $\beta$ -Methylbutyrate (HMB) alleviates muscle strength loss and limited joint flexibility following eccentric contractions』, Tsuchiya Y, Ueda H, Sugita N, **Ochi E**. *Journal of the American College of Nutrition* (2021年) 40巻3号, P211-218.
- \* 『Cardiorespiratory fitness in breast cancer survivors: a randomised controlled trial of home-based smartphone supported high intensity interval training』, **Ochi E**, Tsuji K, Narisawa T, Shimizu Y, Kuchiba A, Suto A, Jimbo K, Takayama S, Ueno T, Sakurai N, Matsuoka Y. *BMJ Supportive and Palliative Care* (2021年8月)13:bmjsplice-2021-003141. P1-5
- \* 『Polyunsaturated Fatty Acids, Exercise, and Cancer-Related Fatigue in Breast Cancer Survivors』, Matsuoka Y, Tsuji K, **Ochi E**. *Frontiers in Physiology* (2021年10月) 13巻12号, 759280.
- \* 『Comorbid insomnia among breast cancer survivors and its prediction using machine learning: a nationwide study in Japan』, Ueno T, Ichikawa D, Shimizu Y, Narisawa T, Tsuji K, **Ochi E**, Sakurai N, Iwata H, Matsuoka Y. *Japanese Journal of Clinical Oncology* (2021年10月) P1-9.
- \* 『Eccentric exercise causes delayed sensory nerve conduction velocity but no repeated bout effect in the flexor pollicis brevis muscles』, **Ochi E**, Ueda H, Tsuchiya Y, Nakazato K. *European Journal of Applied Physiology* (2021年11月) 121, P3069-3081.
- \* 『Impact of a single bout of resistance exercise on serum Klotho in healthy young men』, Morishima T, **Ochi E**. *Physiological Report* (2021年11月) 9巻12号, e15087.
- \* 『Oncology care providers' awareness and practice related to physical activity promotion for breast cancer survivors and barriers and facilitators to such promotion: a nationwide cross-sectional web-based survey』, Shimizu Y, Tsuji K, **Ochi E**, et al. *Supportive Care in Cancer* (2021年12月) 30巻4号, P3105-3118
- \* 『Accuracy of exercise-based tests for estimating cardiorespiratory fitness and muscle strength in early-stage breast cancer survivors in Japan』 *Supportive care in cancer*, Tsuji K, Matsuoka Y, Kuchiba A, Suto A, **Ochi E**, (2022年1月) in press
- \* 『大学時代に体育会系であった勤労者は精神的に優れているか? - 東京都に位置する総合私立大学の卒業生を対象として』, **荒井弘和**・**杉本龍勇**・増田昌幸・釜野祥太郎・徳安彰, *スポーツ産業学研究* 31, No.2 (2021), P.165-P.172.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

- \* 『学生におけるスポーツ・ライフ・バランスとメンタルヘルス：入試経路による比較』, **荒井弘和・杉本龍勇・増田昌幸・釜野祥太郎・徳安彰**, スポーツ産業学研究 31, No.3 (2021), P.341-P.349.
  - \* 『在校生の大学運動部に対する評価と入学満足度の相関に与える影響』, **杉本龍勇**, 2022年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要 40, P.5-P.11.
  - \* 『オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に伴って認知されたスポーツおよびソーシャル・レガシーの構成要素』, 額賀将・**荒井弘和・高見京太・山本浩**, 2021年10月1日, スポーツ産業学研究 31, P.445-P.456.
  - \* 『大学生テニス選手における競技特性不安, 心理的競技能力及び性格特性の関係』, 沖きあら・博田広樹・**中澤史**, 2022年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要40号, P.41-P.45.
  - \* 『外的負荷が肘関節角度調節能力に与える影響』, 若田部舜・**林容市**, 2021年4月10日, 体育学研究 66, P.179-P.189.
  - \* 『コロナ禍における運動時のマスク着用』, 田中喜代次・**林容市**・金泰浩, 未病と抗老化, 2021年11月30日, 未病と抗老化 30, P.8-P.10.
  - \* 『女子バスケットボール選手のリバウンド動作時における下肢キネマティクス』, 瀬戸宏明・篠塚ななみ・**泉重樹・平野裕一**, 2021年4月30日, 臨床スポーツ医学 29(2), P.260-P.267.
  - \* 『運動部活動においてパワーハラスメントを行使する指導者に対して選手が抱く感情』, 堀本菜美・**山田快**, 2022年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要 第40号, P.37-P.40.
  - \* 『Social media content strategy for sport clubs to drive fan engagement』(原著論文), Annamalai, B., **Yoshida, M.**, Varshney, S., Pathak, A.A., & Venugopal, P., 2021年9月, Journal of Retailing and Consumer Services, 62(102648): 1-13.
  - \* 『Social capital and consumer happiness: Toward an alternative explanation of consumer-brand identification』(原著論文), **Yoshida, M.**, Gordon, B.S., & James, J.D., 2021年8月, Journal of Brand Management, 28(5): 481-494.
  - \* 『Service quality and its effects on consumer outcomes: A meta-analytic review in spectator sport』(原著論文), Biscaia, R., **Yoshida, M.**, & Kim, Y., 2021年6月, European Sport Management Quarterly, Advance online publication.
- 【学会発表】
- \* 『大学生アスリートを対象とした価値を考えるプログラムの探索的検討』, 日本スポーツ心理学会 48 回大会, 2021 年 11 月 28 日, オンライン, **荒井弘和**・深町花子
  - \* 『安定性の異なるトレーニング器具を使用したスクワット時の筋活動』, 日本アスレティックトレーニング学会・第 10 回学術大会, 2021 年 10 月 9 日, オンライン, 秋山智紀・**泉重樹**
  - \* 『社会人サッカーチームの傷害調査-COVID-19 によるスポーツ活動の長期中断後の再開に着目して-』, 日本アスレティックトレーニング学会・第 10 回学術大会, 2021 年 10 月 9 日, オンライン, 能勢将輝・**泉重樹**
  - \* 『アマチュアボクシング選手の外傷・障害調査 一男女別の検討』, 日本アスレティックトレーニング学会・第 10

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。



回学術大会, 2021年10月9日, オンライン, 泉重樹・梅下新介・小松泰喜・荒牧勇・石橋 勇・佐藤義裕・相澤徹

- \* 『アマチュアボクシング選手の外傷・障害調査 ノックアウト経験の検討』, 日本臨床スポーツ医学会・第32回学術集会, 2021年11月13日, オンライン, 泉重樹・梅下新介・小松泰喜・荒牧勇・石橋勇・相澤徹・佐藤義裕
- \* 『Effect of home-based high-intensity interval training and behavioral modification using information and communication technology on cardiorespiratory fitness and exercise habits among sedentary breast cancer survivors: the habit-B randomized controlled trial in progress』, 2021年5月22nd World Congress of Psycho-Oncology & Psychosocial Academy, Tsuji K, Ochi E, Shimizu Y, Kuchiba A, Narisawa T, Okubo R, Ueno T, Shimazu T, Kinoshita T, Suto A, Sakurai N, Matsuoka Y.
- \* 『Association between physical activity and fear of cancer recurrence in breast cancer survivors: a nationwide cross-sectional study』, 2021年5月22nd World Congress of Psycho-Oncology & Psychosocial Academy, Narisawa T, Shimizu Y, Tsuji K, Ochi E, Okubo R, Kuchiba A, Sakurai N, Ueno T, Iwata H, Matsuoka Y.
- \* 『簡易評価法による日本人乳がんサバイバーにおける最高酸素摂取量の予測可能性』, 2021年9月 第76回日本体力医学会 (於 三重県), 街勝憲・松岡豊・口羽文・首藤昭彦・越智英輔
- \* 『Effect of home-based smartphone-supported high-intensity interval training on cardiorespiratory fitness in breast cancer survivors: A randomized controlled trial of the habit-B program』, 2021年12月44nd Annual San Antonio Breast Cancer Symposium (SABCS) (San Francisco: CA, USA), Ochi E, Tsuji K, Narisawa T, Shimizu Y, Kuchiba A, Suto A, Jimbo K, Takayama S, Ueno T, Sakurai N, Matsuoka Y.
- \* 『High-intensity interval training in breast cancer survivors: A systematic review』, 2021年12月44nd Annual San Antonio Breast Cancer Symposium (SABCS) (San Francisco: CA, USA), Tsuji K, Matsuoka Y, Ochi E.
- \* 『がんサバイバーシップケアを強化するための在宅運動研究への期待/Expectations of home-based exercise research for enhancing cancer survivorship care』, 2022年2月 第19回日本臨床腫瘍学会 (於 京都府) Matsuoka Y, Tsuji K, Ochi E.
- \* 『2021年現在のわが国の陸上競技中長距離選手におけるテーパリング戦略に関する研究—刺激練習の実施状況に着目して—』, 日本体育・スポーツ・健康科学学会 第71回大会, 2021年9月7日～9月9日, オンライン, 小島翼・高見京太
- \* 『現在のわが国の陸上競技中長距離競技者におけるテーパリング戦略』, 第76回日本体力医学会大会, 2021年9月17日～9月30日, オンライン, 小島翼・高見京太
- \* 『居室放送による一般改善指導「体づくりトレーニング」の取り組み状況について』, 日本矯正教育学会第57回大会, 2021年10月15日～11月15日, 高見京太・久木野純子・井上智宏
- \* 『オリンピック柔道参加をめぐる嘉納治五郎の思想』, 日本スポーツ人類学会・第23回大会, 2022年3月27日, 広島大学 (広島県), 永木耕介
- \* 『指導者のリーダーシップが部員のライフスキルの獲得に与える影響—高校のサッカー部を対象として—』, 九州スポーツ心理学会第34回大会, 2021年3月6日, オンライン開催, 博田広樹・中澤史

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

- \* 『外的注意時の認知的負荷量の差異が運動中の努力感覚に及ぼす影響』, 第76回 日本体力医学会大会, 2021年9月17～19日, オンライン開催, 若田部舜・林 容市
- \* 『ラグビーにおけるスクリーパスのボール速度に影響を及ぼす要因の検討』, 日本体育測定評価学会第21回大会, 2022年3月5日, オンライン開催, 本田真澄・林容市
- \* 『サッカーの競技レベルの差異が走速度グレーディング能力に及ぼす影響』, 日本体育測定評価学会第21回大会, 2022年3月5日, オンライン開催, 菅谷亮介・若田部舜・林容市
- \* 『アスリートの自己調整学習を導くコーチの関与』, 日本スポーツ心理学会 第48回大会, 2021年11月20日—11月28日, オンライン, 山田 快・堀本菜美
- \* 『スポーツ観戦とソーシャルキャピタル：プロスポーツにおける検証』, 日本スポーツマネジメント学会, 2022年3月, オンライン開催 (Zoom ウェビナー), 須藤大斗・吉田政幸

#### 【その他】

##### (報告書) 伊藤マモル

- ・ 『学生及び職員による帰宅困難者支援施設運営ゲーム (モデル校：法政大学) の学習体験』, 2022年3月31日, 令和3年度「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度共同事業, 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究報告書, P. 53-P. 67.
- ・ 『一時帰宅困難者一時滞在支援施設における健康管理システムの検討』, 2022年3月31日, 令和3年度「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度共同事業, 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究報告書, P. 68-P. 74.

##### (コラム) 杉本龍勇

- ・ 今、君たちに伝えたいこと「本当の『格好よさ』とは何か？」道徳と特別活動 文溪堂 2021年7月15日
- ・ 時評「育成年代への指導」静岡新聞 (朝刊) 2021年4月21日
- ・ 時評「『想定外』無くすために」静岡新聞 (朝刊) 2021年6月24日
- ・ 杉本龍勇走論各論「県勢の実力発揮に期待」静岡新聞 (朝刊) 2021年7月29日
- ・ 杉本龍勇走論各論「県内若手の台頭望まれる」静岡新聞 (朝刊) 2021年6月28日
- ・ 杉本龍勇走論各論「スポーツの未来拓く」静岡新聞 (朝刊) 2021年8月10日
- ・ 杉本龍勇走論各論「特有の魅力を楽しみたい」静岡新聞 (朝刊) 2021年8月23日
- ・ 時評「公共スポーツ施設の運営」静岡新聞 (朝刊) 2021年10月20日
- ・ 時評「スポーツは持続可能か」静岡新聞 (朝刊) 2021年12月15日
- ・ 時評「スポーツに関する社会問題」静岡新聞 (朝刊) 2022年2月17日

##### (コメント) 杉本龍勇

- ・ 「五輪事前合宿 準備苦慮」毎日新聞 2021年5月23日
- ・ 「五輪事前合宿 自治体悲鳴」中日新聞 2021年6月2日
- ・ 「オリンピックの経済学者が指摘」日刊ゲンダイ 2021年6月26日
- ・ 「レガシーなき五輪」東京スポーツ 2021年7月7日
- ・ 「五輪に失望感 なぜ？」東京新聞 2021年7月14日
- ・ 「サッカー男子 主将・吉田 メダルへ執念」毎日新聞 2021年8月4日
- ・ 「中止 常に狙上載せて」東京新聞 2021年8月25日
- ・ 「五輪 崇高さより」軽さ“感じる”朝日新聞 2022年2月16日
- ・ 「岡崎慎司はなぜ足が速くなったのか？」Sports Graphic Number 1030 2021年7月15日

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

- 「片脚動作で使える体幹を手に入れる」 Tarzan 2021年8月12日

(出版物) **中澤 史**

- 『なぜサブメンバーをレギュラー練習に入れてはいけないのか?』, 2021年4月15日, 月刊バレーボール 75巻5号, P.80-P.81.
- 『バレーボールの見え方』, 2021年5月14日, 月刊バレーボール 75巻6号, P.90-P.91.
- 『性格とは何か?』, 2021年6月15日, 月刊バレーボール 75巻7号, P.90-P.91.
- 『不安とパフォーマンス』, 中澤史, 2021年7月15日, 月刊バレーボール 75巻8号, P.94-P.95.
- 『大学スポーツにおける光と影』, 2021年8月1日, 大学出版 127号, P.1-P.7.
- 『パフォーマンスと自己効力感の関係』, 2021年8月15日, 月刊バレーボール 75巻10号, P.110-P.111.
- 『チームのパフォーマンスを予測するための心理テスト』, 2021年9月15日, 月刊バレーボール 75巻11号, P.94-P.95.
- 『ネガティブな思考を改善する方法』, 2021年10月15日, 月刊バレーボール 75巻13号, P.114-P.115.
- 『結果は物事のとらえ方しだいで決まる』, 2021年11月15日, 月刊バレーボール 75巻14号, P.84-P.85.
- 『ストレスとは何か?』, 2021年12月15日, 月刊バレーボール 76巻1号, P.112-P.113.
- 『ストレスとのつきあい方』, 2022年1月19日, 月刊バレーボール 76巻2号, P.112-P.113.
- 『ストレスに強い人とは! ?』, 2022年2月15日, 月刊バレーボール 76巻3号, P.100-P.101.
- 『なぜ緊張するとパフォーマンスは低下するのか?』, 2022年3月15日, 月刊バレーボール 76巻4号, P.78-P.79.

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- 『法政大学スポーツ研究センター紀要』(第40号)

3.1③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等) **2021年度1.1③に対応**

※研究所(センター)がこれまでに発行した刊行物に対する2021年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2021年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。なお、研究所(センター)に該当するものがない場合は、研究所員によるものを含めることが出来る。但し、この場合は研究所の研究領域に関するものとする。

※2021年度に引用された論文

泉 重樹: 引用件数2件

越智 英輔: 年引用件数202件(Google Scholar), 172件(Research Gate)

杉本 龍勇: 引用件数2件

林 容市: 引用件数8件(Google Scholar)

山本 浩: 引用件数1件

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

3.1④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等) **2021年度1.1④に対応**

※2021年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

スポーツ研究センター所員同士での横断的な取り組みをより活性化して、外部に発信できる礎を築いている。現状では、センターそのものに対する外部評価は受けていないが、従来充実している所属所員の学術的な知見の発信に加え、各所員教導での外部資金獲得、学内における学生・教職員へのスポーツ・健康づくり活動への貢献度を高めることで、全学のスポーツ・健康に関する機関としての立ち位置の明確化を目指していく。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

3.1⑤科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況 **2021年度1.1⑤に対応**

※2021年度中に研究所(センター)として応募した科研費等外部資金及び2021年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者(代表・分担の別)、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を簡条書きで記入。

- \* (採択)『令和4—6年度科学研究費補助金 基盤研究(C)』～アスリートの価値観はコミュニティの価値観とどのよう

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

に共存するのか?～, (研究代表者) **荒井弘和**

- \* (採択)『日本心理学会 2021 年度第 2 回「新型コロナウイルス感染拡大に関連した実践活動及び研究」助成』～COVID-19 に対する感染予防行動の変容過程：東京都民を対象としたパネル調査～, (研究代表者) **荒井弘和**
- \* (採択)『令和 3—5 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)』～トップアスリートの心理的能力を向上する新たなメンタルトレーニングプログラムの開発～, (研究分担者) **荒井弘和**
- \* (採択)『科研費 基盤研究(C) (一般)』～弾性タンパク質コネクチン (タイチン) が伸張性収縮前後の筋・関節機能に及ぼす影響～, (代表研究者：継続) **越智英輔**
- \* (採択)『科研費 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)』～遺伝的要因が伸張性運動前後の筋・関節機能に及ぼす影響～, (代表研究者：継続) **越智英輔**
- \* (採択)『科研費 基盤研究(A) (一般)』～サルコペニアに伴う骨格筋の質的变化：メカニズムと有効な対策～, (分担研究者：継続) **越智英輔**
- \* (採択)『2020 年度 科研費 基盤研究(C) (一般)』～心理学的アプローチを生かした運動介入が乳がんサバイバーのがん再発不安に与える影響～, (分担研究者：継続) **越智英輔**
- \* (採択)『2021 年度 科研費 基盤研究(C) (一般)』～低負荷スロートレーニングによる血管内皮機能および骨格筋の適応メカニズムの解明～, (分担研究者：継続) **越智英輔**
- \* (採択)『令和 3 年度 日本医療研究開発機構 医療機器等における先進的研究開発・開発体制強化事業』アプリを活用した在宅の高強度インターバルトレーニングが乳がんサバイバーの倦怠感に与える影響：多施設共同ランダム化比較試験～, (研究代表者：新規) **越智英輔**
- \* (採択)『公益財団法人 太陽生命厚生財団 助成研究』～コロナ禍における障害者レクリエーションの発想転換と新たなプログラムの開発～, **越部清美**
- \* (採択)『2020～2022 年度 科研費 基盤研究(C) (一般)』, 「隠された? 嘉納治五郎の柔道思想—オリンピックの柔道採用をめぐる戦前と戦後の変化」, **永木耕介**
- \* (採択)『2020 年度～2022 年度 科学研究費, 基盤研究 (C) (一般)』研究課題: 「スポーツ観戦と持続的ウェルビーイング: 先行要因と結果要因の検証」 (研究代表者) **吉田政幸**
- \* (応募・採択)『2022 年度 科研費 基盤研究(C) (一般)』～身体動作・運動の調整力発達を促進しうる身体活動推奨年代および実践内容の解明～ (研究代表者) **林容市**
- \* (応募・採択)『2022 年度 科研費 基盤研究(C) (一般)』～アスリートの価値観はコミュニティの価値観とどのように共存するのか?～ (研究分担者) **山田快**
- \* (応募)『2022 年度 科研費 若手研究』～スポーツイベントにおける社会的影響とスポーツに対する関与の関係について～, **井上尊寛**
- \* (応募)『2022 年度 科研費 基盤研究(C) (一般)』～運動部活動による選手の人格形成および心理社会的スキル向上のプロセスの解明～ (研究代表者・分担者) **中澤史・吉田康伸**

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

<p>* (応募)『2022年度 科研費 基盤研究(C) (一般)』～アスリートの主体性を高めるコーチング指標を創り出す～、 <b>山田快</b></p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・特になし</p>

3.1⑥研究所(センター)における研究活動に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。2021年度1.1⑥に対応

<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>2021年度内の運営委員会やプロジェクト報告会は、COVID-19への罹患予防を念頭にオンラインで実施した。また、研究プロジェクトの一つである本学学生の初年次における体格・体力測定においては、各学部の科目責任者から得た種々の対策や工夫を紀要での報告を通じて所員に周知し、コロナ禍の研究活動における各種測定に関する情報共有を行った。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・特になし</p>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>学内の各学部に所属する専門分野の異なる教員に所員の委嘱をしているため、スポーツ科学全般にわたって有益な研究成果の発信が成されている。また、センター内における所員間の協同によって、基礎から実践までのスポーツや健康をキーワードとする研究・調査の成果を有機的に繋げることができ、学生のスポーツ活動へも充実した指導・支援が実践されている。2021年度は研究における所員の協働による包括的な研究テーマを決め、学術研究振興資金に申請した。申請は採択されなかったものの、本研究センターの特徴でもある横断的な所員同士による共同研究を今後も促進し、社会的貢献度を高められるような活動を充実・継続させていく。さらに、全学的な組織としての本センターの存在意義を踏まえ、従来の学生や地域住民に対しての指導・支援に加え、これまで不十分であった教職員を対象とした職域における貢献についても充実させる予定である。</p>

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画(既に実施している場合にはその進捗状況も含めて)をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>2021年度大学評価結果総評において、研究活動については良好な成果を上げていると評価して頂いているが、これは所属所員個別の成果に依存していると判断される。そのため、個々の研究に特化している現在の研究活動状況を維持しつつ、本センター所員同士の協同を活性化していくことが喫緊の課題である。また、充実した所員の研究成果を社会に周知する手段として、従来のホームページや公開講座に加え、シンポジウムや研究会等の開催を通じた社会貢献の方法も模索していく予定である。</p>

【研究活動の評価】

<p>スポーツ研究センターでは、基幹となる6つのプロジェクトを実施したほか、センターの所員が多数の対内、対外的なセミナー活動、書籍執筆、論文公表、学会発表、新聞等でのコラム掲載を行っており、当センターの規模を考慮すると、非常に活発な研究・教育活動が行われており大変評価できる。過年度も含めた当センターの研究成果は、他文献での被引用回数の多さからも、その社会的評価の高さがわかる。学内横断的な組織として、センター所員の協働による包括的な研究テーマを決め、学術研究振興資金に申請したという試みも、その結果に関係なく、当センターの存在意義を強めるものであり非常に評価できる。この試みは、当センターが認識している「研究活動における良好な成果が所属所員個別の成果に依存している」という問題点を克服しようというものであり、今後も同様の試みを継続していくことを期待している。判断外部資金の獲得状況も大変良い状況で、所員の多くが研究代表者もしくは分担者として科研費を持っている。COVID-</p>
---

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

19 への罹患予防についても、運営委員会やプロジェクト報告会をオンラインで行い、学部生の体力測定に関しても、各学部の科目責任者から得た種々の対策や工夫を紀要での報告を通じて所員に周知し、コロナ禍の研究活動における各種測定に関する情報共有を行うなど最大限の配慮がみられた。

#### 4 教育研究等環境

##### (1) 点検・評価項目における現状

##### 4.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

##### 4.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどを配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018年度4.1①に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた

※教育研究支援体制の概要を記入。

2017 年度に専任研究員を設置し、2021 年度も採用された研究員が本センターの教育研究活動の支援を担った。これにより、本センターの研究プロジェクトの一部が促進・充足したと判断している。研究員は、センター全体への貢献に加えて研究員自身の研究結果も学会誌への論文投稿や学会発表として発信した。また、これらの研究活動に加えて、研究員が中心となった体育会活動に対する指導・支援も実践されている。研究員自身が直接的に体育会の強化に携わると共に、各所員の活動のコーディネーターとしての役割を担うことで、複数の体育会の部活動に対して本センター所員の充実した指導・支援が提供されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

##### 4.1②研究所（センター）として、教育研究環境の整備に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。新規

※取り組みの概要を記入。

本センター規定で定められている「スポーツ施設利用に関する調整及び管理・運営の基本事項に関する協議」に準じて、関連各部署と協同で COVID-19 への罹患増大抑制を念頭にしたスポーツ施設の管理・運営を行った。具体的には、COVID-19 への罹患リスク低減に向けた施設利用者の明確化、ソーシャルディスタンス確保のための利用者数制限等を実施した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

##### (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

##### 内容

スポーツや健康づくりの専門家を所員として有する本センターが、学内のスポーツ施設の管理・運営に携われることは、学生や教職員のスポーツや身体活動の有益な実践に資するものであり、本センターの設置目的にも準じた活動内容であると判断される。2020 年冒頭からのコロナ禍において、本センターにおいてもスポーツや身体活動実施に関する様々な情報・知見が蓄積されており、これらを社会に向けて発信している所員も在籍している。

##### (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

##### 内容

・本センターは、その設置目的として体育施設の運営に関する事項を含めているが、実際の管理・運営に際しては各キャンパスの保健体育センターや施設部などの協同が必須となっている。また、科目を設置している各学部、ILAC、SSI などの関連事務との協議も必要となるため、これらの関連部署間でのコミュニケーションが迅速かつ柔軟に行われる制度の整備が課題であると考えられる。また、本センターは付置研究所として設置されているものの、施設に関連した事業として

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S」：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。



はスポーツ施設に関連した内容に留まっており、学内のスポーツ・身体活動を実践する各環境に対して言及する権限を有していない。そのため、本センターに所属する所員の研究環境における COVID-19 の罹患予防に関しては言及することができない状況にある。この点については、各所員からの要望等も含めて、関連各所と協議を進めていく必要がある。

**【教育研究等環境の評価】**

スポーツ研究センターでは、2017 年度に専任研究員を採用したことで、センター所員の研究支援体制が確立され、それが 2021 年度も引き続き継続、機能しているということである。ただ、専任研究員は自身も研究活動および体育活動をされているということであり、当該評価項目で意図される研究支援などの事務的な仕事を担う者として適切かは疑問が残る。研究センターの予算の関係もあり、研究支援スタッフを常駐されることは難しいかもしれないが、今後、所員全員の共同プロジェクトなどで科研費が獲得できた際などは事務的な支援を行うスタッフを配属することが、当研究センターの活動規模を考えると望ましいのではないかとと思われる。これは、予算を勘案しながら、長期的な課題として取り組んでいただきたい。

センターの管理に関しては、関係各所との協議が必要などの問題点が残されるものの、COVID-19 への罹患リスク低減に向けた施設利用者の明確化、ソーシャルディスタンス確保のための使用者数制限等を実施し適切に運用している。

**5 社会貢献・社会連携**

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

5.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018 年度 5.1①に

対応

B：改善することができなかった

※取り組み概要を記入。

従来、小金井地区で実施していた地域住民と協同でのスポーツ活動支援は、コロナ禍における社会情勢に鑑み実施できなかった。また、例年、多摩地区では複数の公開講座を実施しているが、施設使用や対面での実施が困難であることを理由に、今年度は予定していた講座は全て開催できなかった。

【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

公開講座については、センター所員の有する専門知識や経験を還元できるため、地域住民に対しての社会貢献事業としては非常に有益である。また、毎年度継続して開催しているため、認知度は高く、参加者からも高い評価を得ている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

公開講座については、有益な社会貢献事業であるものの、所属所員の個人的なリソースに依存している面も大きく、また必要な予算の確保も検討事案である。今後、研究成果を発信するためのシンポジウムや研究会の開催を検討しているが、

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

本センターの限定された運用予算の配分を含めて、各事業の開催規模・頻度等の検討が今後の重要な課題であると考えている。

**【社会貢献・社会連携の評価】**

スポーツ研究センターでは、以前より実施していた、小金井地区での地域スポーツ活動支援、多摩での公開講座はコロナ禍における社会情勢に鑑み実施を見送っている。これらは外生的な要因によるものが大きく仕方ない側面がある。特に、スポーツ活動に関しては、物理的な接触があるのでより慎重にならざるを得ないと考えられる。しかしながら、公開講座についてはオンラインで代替するなどの方法があるので、今後は事前に周知した上でオンラインに切り替えていくなどの代替手段の検討が望まれる。

**6 大学運営・財務**

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

6.1①運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度6.1①に対応

はい

※概要を記入。

スポーツ研究センターは、所長1名、副所長1ないし2名、所員、任期付専任研究員、客員所員等から構成され、運営委員会を組織している。また、担当理事、関連する保健体育研究センター長等も運営委員会への出席を求め、透明性の高いセンター運営を行っている。また、独自の規程を定め、その内容に則って運営委員会を年間4回程度開催し、充実した活動を展開している。さらに、研究所助成金等の運営予算は運営委員会での承認を受けて適切に執行され、現在までに財務上の問題を生じたことはない。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

所員の研究に関する専門分野は多岐にわたり、スポーツ分野の多様性に対応できる。所員の協働により、新しい視点でスポーツにおける包括的な研究を行える可能性を有している。現在まで、規定に則って事業が運営されており、所長等の選任、所員の委嘱も適切に行われてきた。また、研究開発センターからの研究所研究助成金の配分額算定の根拠となる科学研究費補助金への応募状況も問題は生じていない。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

現在、本センターには専任職員が配置されておらず、運営に係る事務的業務は多摩体育課職員が担っている。しかしながら、多摩体育課職員が本センターの運営業務を他業務と兼務することで、業務負担が増大している。学内の職員数や業務分担上、現状は致し方ない面もあるが、担当職員の業務負担を軽減するための方策を検討することは、大きな課題であると判断される。また、本センターの運営予算（経常経費）は、『紀要』の印刷費、『定期購読雑誌』の資料費が中心であり、あわせて、プラス上位機関である研究開発センターから研究所研究費補助金のみである。本センターの活動を充実させることを目的とした学外の研究助成金等の獲得は、今後の重要な課題である。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

【大学運営・財務の評価】

スポーツ研究センターは、所長1名、副所長1もしくは2名、所員、任期付専任研究員、客員所員等から構成され、運営委員会を組織している。また、担当理事、関連する保健体育研究センター長等も年4回開催される運営委員会への出席を求め、客観性の高いセンター運営を行っていることが伺われる。また、「4 教育研究等環境の評価」でも指摘したことであり、当センターでも認識されている問題であるようだが、センターの事務を担当するスタッフがいないため、他の部署に事務作業を依頼するような状況になっているという問題があるようである。予算が許すのであれば研究支援も含めた事務スタッフの採用が強く望まれる。

III 2021 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動	
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。	
	年度目標	昨年は、コロナウイルス感染拡大の影響により研究センター内での勉強会やセミナーの開催頻度を上げることができなかった。今年度はオンラインを活用しながらの開催頻度を上げ、積極的な意見交換を通じて各所員の研究に役立てる。また、所員同士の研究における連携及び相互作用を創出するよう努める。	
	達成指標	共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部資金獲得を目指す。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		研究センター内での勉強会を開催した。ここでは、体育会強化の進捗状況の報告と今後の改善策について議論した。またこれらに関する研究の方向性についても検討を行い、所員同士の研究の連携に役立てることができた。	
改善策	開催頻度を増やす。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上に貢献する。	
	年度目標	昨年はコロナウイルス感染拡大の影響により、継続していた公開講座を開講することができなかった。これを受け、オンラインを活用した公開講座の準備を行い、開講できるように努めたい。また新たに専任研究員を採用したことに伴い、更に法政スポーツの強化を促進したい。	
	達成指標	法政スポーツの競技力および社会性の両面における外部からの評価が高まるよう、強化・育成に努める。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		静岡県スポーツ協会主催の育成年代指導者講習会（オンライン）に3名の所員を講師として派遣し、高評価を得ている。公開講座の開催を予定しながらも、コロナウイルス感染拡大のため、延期をしたものの開催に至らなかった。来年度に向けて、これまで以上に内容を充実させて、開催回数も増やすことが、既に話し合われている。	
改善策	対面での公開講座のみならず、オンラインを利用したシンポジウム等を主催する。		
【重点目標】 研究センター内でセミナーおよび勉強会の開催頻度の増加と内容の充実			
【目標を達成するための施策等】 オンラインミーティングなどを活用し、各所員の都合にフレキシブルに対応しながら開催する。			
【年度目標達成状況総括】			

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

2年来続いているコロナウイルス感染拡大の状況に対し、2021年度よりも柔軟に対応しながら活動を活性化することができた。今後もこうした柔軟な対応をアップデートし、発展させていきたい。

**【2021年度目標の達成状況に関する大学評価】**

スポーツ研究センターでは、研究センター所員間の意見交換を目的とした勉強会、外部への公開講座の開催が年度目標と設定されている。2021年度はCOVID-19感染拡大の影響により、当該活動に大きな制約が課された状況となった。そのため、年度目標の達成状況としては不十分な状況であると考えられる。しかしながら、そのような中でも所員間の勉強会を開催し、2021年度に開催できなかった外部への公開講座は2022年度以降に開催回数を増やして補う方針を出しており、現在の状況を改善しようという努力がみられ、評価できる。

**IV 2022年度中期目標・年度目標**

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした包括的な研究プロジェクトを起ち上げる。また、所属所員の研究の知見を有機的に繋げ、より広く周知することを目的としたシンポジウムや研究会等を開催する。
	年度目標	運営委員会でテーマを設定した上で、所員や研究員、客員所員等によるシンポジウムや研究会の開催について、具体的な実施内容を検討して方向性を定める。
	達成指標	・本センター所員の研究内容を踏まえたシンポジウムや研究会の開催に向けた人選を完了する。 ・シンポジウムや研究会のテーマや開催時期、方法などに関する検討を実施する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	近隣地域居住者を対象として現在まで継続している公開講座に加え、関連部局と連携して教職員を対象とした職域におけるスポーツや身体活動の促進、健康づくりへ貢献できる活動を進展する。また強化のための指導・支援を行う体育会の対象部を増やし、法政スポーツの活性化に貢献する。
	年度目標	教職員を対象とした職域における身体活動量増大や健康づくりを目的に、関連部局との協議や実態調査を踏まえて実施内容を検討し、活動に向けた準備を行う。
	達成指標	・学内の関連部局との協議および状況確認のための教職員への調査を実施する。 ・体育会の各部に対して、本センター所員による強化に向けた指導・支援の要望を把握する。
<p><b>【重点目標】</b> 教職員を対象とした職域における身体活動量増大や健康づくりを目的に、関連部局との協議や実態調査を踏まえて実施内容を検討し、活動に向けた準備を行う。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b> ・学内の関連部局との協議を行い、本センターの貢献可能な内容・事業を明確化する。さらに、状況確認を目的に、本センターの活動内容に対する教職員の関心等について調査を実施する。</p>		

**【2022年度中期目標・年度目標に関する大学評価】**

スポーツ研究センターにおいて、掲げられている中期目標に沿った形で各年度目標と達成指標は各項目ともおおむね適切に設定されている。2021年度の所員で試みた科研費への応募するなど、所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした包括的な研究プロジェクトを起ち上げるという下地は十分にできていると思われるので、その基礎固めを行い、シンポジウムや研究会等の開催を通して研究成果を共有、公表していただきたい。また、スポーツ等の支援活動を教職員に拡大するという新たな目標に関しても、教職員の福利厚生改善という寄与にもつながるので、2022年度以降は委員会等で協議し、より明確な年度目標を設定して推進していただきたい。

**【大学評価総評】**

スポーツ研究センターは、2021年度大学評価委員会の評価結果への対応、研究活動という点では非常に良好な成果を示し、また、コロナウイルス下で不十分であった年度目標の達成状況についても、2022年度中に改善して課題を解決しよ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

うという姿勢が明示してあり、大変評価できる。また、2022年度以降は、スポーツ支援活動を教職員にも拡大させるという野心的な目標も持っており、今年度以降、当該目標を具現化していき実施することが期待される。その一方で、研究センター内における研究支援、事務作業の補助に関しては不十分な状況であると言わざるを得ない。これは研究所の予算の問題もあるので難しい問題であるが、長期的には科研費などの一時的な資金に頼ることなく、継続的な資金をもとにして事務スタッフを配置して対応することが望ましい。そのためにも、研究所が示してきた高い研究力、外部への発信力を内部にも周知してアピールすることが期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。